

## チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解

——「マッシュルームの下で」——

平 野 順 雄\*

An Essay on Charles Olson's "Under the Mushroom" in *Muthologos*

Yorio HIRANO

チャールズ・オルソン (Charles Olson, 1910-70) 著『ミュソロゴス』(*Muthologos*, 1979) は、1963年から1969年の間にオルソンが行なった講演や、シンポジウム、座談、インタビューなどを集めた多様なテキストの集合である。本稿の目的は、『ミュソロゴス』中の最初の座談「マッシュルームの下で」が、どのような内容のものであるかを紹介することである。だがその際に、座談の内容ばかりではなく、座談の流れや特徴、および座談全体の意味についても考えて見なければならない。

### キーワード

チャールズ・オルソン	Charles Olson
ブラック・マウンテン派詩人	Black Mountain Poets
『ミュソロゴス』	<i>Muthologos</i>
「マッシュルームの下で」	"Under the Mushroom"
ティモシー・リアリー	Timothy Leary

### I. 座談の状況

『ミュソロゴス』の編者ジョージ・F・バタリック (George F. Butterick) は、座談の様子を以下のように説明している。

「マッシュルームの下で」は、1963年11月16日に「グラトウィック・ハイランズ」("Gratwick Highlands") で行われた座談 (discussion) である。座談はニューヨーク州パヴィリオン (Pavillion, New York) にあるウィリアム・グラトウィック夫妻 (Mr. and Mrs. William Gratwick) の住居で行なわれた。そこは、バッファロー (Buffalo) の東約40マイル地点に位置し、ワイオミング (Wyoming) に近い。ワイオミングはオルソンがニューヨーク州立大学バッファロー校で教鞭を取っていた時に、家族とともに住んでいた場所である。グラトウィック夫妻は、何度もウィリアム・カーロス・ウィリアムズ (William Carlos Williams) を招い

---

\*人間関係学科 教授

たことがあり（ウィリアムズの『多くの愛』[Many Loves]は、「ハリエットとビル・グラトウィックに」献じられている）、他の作家たちも招いた。（中略）

オルソンは、この日、妻のベティ（Betty）と一緒に招かれた。数年前に薬物研究者のティモシー・リアリー（Timothy Leary）と共有した体験の一端を語ることになっていた——1960年12月から1961年2月にかけての体験を——非公式の集団に向かって語るののである。この集団は、しばしばグラトウィック家に集まって最新の興味ある話題を議論してきた。ハリエット・グラトウィックが、ゲストのオルソンを6人から7人の小さな集団に紹介すると、録音テープが回された（20）。

## II. 座談の内容—マッシュルーム体験—

一般に「麻薬」（“drug”）と呼ばれる薬物を服用した際にどのような精神的あるいは肉体的変化が起こるのかを知ろうとして、この小さな集団はオルソンの話に耳を傾けたと推察される。オルソンの話と、質疑応答を余すところなくテープに録音しておこうとする態度からも、この集団の熱心さがうかがわれる。

しかし、この知的な集団はなかなかオルソンの話に聞き入りはしない。それどころか、どことなくオルソンを警戒しているように見える。麻薬体験を持つ男は、いかがわしいとも思っているのだろうか。聞き手である集団が及び腰で、オルソンの話に素直に乗ってこないため、座談は全体的に間延びした印象を与える。だが、オルソンと聴衆とのあまり興味深くないやりとりの後には、オルソンは少しだけ雄弁になり、麻薬体験特有の魅力を語る。しかし、こうして得られた昂揚感は、長く続くことなく、再び味気ないやりとりが始まる。そして、オルソンが麻薬体験の強い魅力を二度目に語ると、第二の昂揚感が訪れる。しかし、この昂揚感もやはり続くことはなく、またしても味気ないやりとりが始まるのである。「マッシュルームの下で」は、この繰り返しである。

座談の味気ない部分については後で考察することにして、まず、オルソンが語る麻薬体験特有の魅力を追ってみよう。しかし、その前にマッシュルームと麻薬の関係を確かめておかねばならない。

### i. マッシュルームと麻薬

座談の中でオルソンは、こう語っている。

But I must have been involved in the first week of the actual use of the mushroom as it was derived at the Sandoz Laboratories into Psilocybin 39, I think is actually the name of the so-called drug. (22)

しかし、マッシュルームを実際に使った最初の一週間のあいだ、私は夢中になっていたに違いない。マッシュルームはサンドス研究所で抽出され、シロシビン39になっていた。それがマッシュルームと呼ばれる麻薬の実際の名前だと思う。

シロシビンは、メキシコなどのキノコから採れる、LSD（lysergic acid diethylamide: リセルゲ酸ジエチルアミド）に似た幻覚剤である。この幻覚剤を服用したとき、オルソンは「バーボンでとても酔っていたので、幾粒かをピーナッツのように飲んだ」（22）と言う。「ピーナッツを——それにマッシュルームを——口の中に放り込み続けた」（I kept throwing the peanuts—and the mushroom—into my mouth）（22）のだと。

引用文の「ピーナッツを―それにマッシュルームを」は、正確さを欠く。なぜなら、ピーナッツに思えたものは、マッシュルームから作ったシロシビンだったのだから、正確には「ピーナッツ、すなわちマッシュルームを」と言うべきところである。しかし、酩酊しているオルソンには、シロシビンはまず、ピーナッツに見えた。次いで、ピーナッツには（シロシビンの原料である）マッシュルームが含まれていることを（ある時点で）はっきりと思い出した。「ピーナッツを―それにマッシュルームを」という奇怪な表現は、以上のようにして生まれたと考えられる。奇怪な表現をそのまま受け取れば、酩酊していたオルソンは、ピーナッツに見える幻覚剤シロシビンとマッシュルームをそれぞれ「口の中に放り込み続けた」ことになるが、それは事実ではない。マッシュルームから作ったシロシビンを次々と口の中に入れたのである。

だが、何のためにマッシュルームを原料とする幻覚剤シロシビンが用いられたのであろうか。オルソンが語った体験談から要点を抜き出すと以下ようになる。

私がこの薬物を服用する一年前に二人の人格心理学者（personality psychologists）が、シロシビンを服用した。一人はティモシー・リアリーで、もう一人はフランク・バロン（Frank Barron）であった。バロンは、リアリーがハーヴァード大学で取り組んでいたプログラムと同種のプログラムを遂行するのに失敗し、あたり一帯に甚大な恐怖を巻き起こした。彼は、創造性を研究した、おそらく最初の教授だった。フランク・バロンは、良く訓練されており、ほとんど病院の心理学者のようだった。バロンはペンシルヴェニアの出身で、リアリーはマサチューセッツ州スプリングフィールド（Springfield, Mass.）の出身である。二人は共に、しかしそれぞれに、メキシコの奥地でにせ医者（*curandera* or *curandero*）が使っていたマッシュルームの袋を手に入れた。

バロンは私に彼が食べた最初の一袋について話してくれた。彼は翌日ヨーロッパに旅立つことになっており、ある娘とデートの約束があった。彼はその娘と二人でマッシュルームの影響を受けたら（*go under the mushroom*）楽しかろうと考えたのである。バロンはマッシュルームを噛み、噛んだマッシュルームをその娘に渡して、ガムのように食べさせた。結局彼はマッシュルームを一袋ぜんぶ食べ、彼女はバロンが噛んだマッシュルームをみな食べた。翌日バロンはヨーロッパに向かって旅立った。ヨーロッパに滞在した10週間の間、さざなみ〔僅かな影響〕（*ripples*）が続いていたとのことだ。バロンが言うには、決して話しかけない種類の人々に話しかけ、経験したことのない経験をしたそうだと。この話を聞くのは実際とてもわくわくした。その理由は、バロンが素敵な薬（*a beautiful dose*）を飲んだに違いないからだ。10週間は、マッシュルームにしては、長いさざなみ期間である（22-23）。

マッシュルームの効果は、歴然としている。バロンがそれまで語りかけようとしたことのない種類の人々に話しかけたことが、その第一の効果である。その結果、はっきりとは語られていないが、それまでしたことのない経験をしたことが、第二の効果である。

オルソンがこの話を聞いて思ったことは、「マッシュルームを普通のドラッグストアで買えないとはひどく恥づかしいことだ」（“I think it’s a wretched shame that we don’t have it [mushroom] in the common drugstore” 23）というもので、バロンの行為を全面的に支持している。また、良く知られた幻覚剤 LSD に関する常識をオルソンは、次のように覆す。

In fact it's blown up the whole idea that LSD is simply chemically a derivative of rye and the ergot. The ergot thing has turned out to be chemically now very much more interesting, because it turns out morning glory—in its simplest form, the Heavenly Blue, the most attractive form—is the same chemical substance and puts you on in almost identical form to the LSD. And the kids were buying it all over the nation in those little packages and they were tearing them open and piling them up until they got a liter or something. (23)

事実、LSD が化学的にはライムギと麦角<sup>ばっかく</sup>の分子変化によって得られるものであるという観念は完全に吹き飛ばされた。麦角と言われるものは、今や化学的にもっと興味深い物であることが判明した、アサガオだと分かったのだ——一番単純な形だと、最も魅力的なヘヴンリー・ブルーが——同じ化学物質であり、LSD とほとんど同じ形で、人をだますのである。だから子供たちは、国中でアサガオの小さな包みを買ひ、袋を破って、アサガオの種を 1 リットルくらいになるまで積み上げる。

つまり、アサガオが、中でもヘヴンリー・ブルーという品種が、LSD と酷似した作用を持つということだ。シロシビン（しばしば原料の名からマッシュルームと呼ばれる）、LSD、ヘヴンリー・ブルーの辿った道は、オルソンによれば以下のようなものだった。

私の知る限りでは、厳しい譴責（the censure）、防止（the prevention）、供給の遮断（the cutting off of the source）が今ではほぼ完全にできるようになったので、マッシュルームはもう作られていない。LSD もそうだ。実際に残ったのはヘヴンリー・ブルーだけだ。（中略）しかし、ずっと昔、シロシビンは研究を目的として、サンドス研究所で作られていた(24)。

では、オルソンのマッシュルーム（シロシビン）体験に耳を傾けよう。

## ii. オルソンの第 1 回マッシュルーム体験

私はグロスターの自宅に旧式のマッシュルームの丸薬を持っていたが——残念なことに——使わなかった。（中略）それらをビーナッツのように食べた夜の翌日、リアリー氏と [アレン・] ギンズバーグ氏に起こされた。二人は、実験に協力してくれるよう要請した人たちだった。二人とも部屋に飛び込んできて私を起こし、どんな具合だったかを尋ねた。私は、ああ、素晴らしかった (well, it was great) と答えた、それは.....[グラトウィックの「私たちに教えてくれないか?」というセリフが入る]分かった、君たちに話そう。私の答えは、それは本当の愛の宴で、マッシュルームの丸薬は真実の丸薬だ (it's a true love feast and a truth pill), であった。私の答えは二人を満足させたようだった、二人は私に答えを急いで出させたのだ.....それで終わりだった。しかし、その時から、さざなみ (ripples) が残った (24)。

第 1 回目のマッシュルーム丸薬（シロシビン）体験は、以上ようであったのだが、グラトウィックとその一団に対するオルソンの答えは、会話文であるためか、少々厳密さを欠いている。「私の答えは、それは本当の愛の宴で、マッシュルームの丸薬は真実の丸薬だ」と訳出した箇所には問題がある。その箇所では、原文の最初の “it” を「それは」としてマッシュルーム丸

薬による体験を指すように訳出し、同じ“it”を文の後半では、マッシュルームの丸薬すなわちシロシビン<sup>1</sup>を指すものとして訳出している。そうしないと意味が通らないからである。とはいえ、同じ“it”に二つの意味を読み込み必要があるのは、もともと文が厳密さを欠くせいである。

厳密さを問題にするなら、われわれも、根本を曖昧にしたままオルソンの文を読んでいくことに気が付く。根本とは、マッシュルームがキノコのマッシュルームを指すのか、それともマッシュルームの丸薬すなわちシロシビン<sup>1</sup>を指すのかである。それはこれまでに見たフランク・バロンのマッシュルーム服用に関する記述に係る。本論35頁をご覧ください。

Baronはマッシュルームを噛み (he chewed the mushroom), 噛んだマッシュルームをその娘に渡して、ガムのように食べさせた (and then feed it to her like gum)。結局彼はマッシュルームを一袋ぜんぶ食べ (and actually he ate the whole bag), 彼女はBaronが噛んだマッシュルームをみな食べた。翌日Baronはヨーロッパに向かって旅立った (22-23)。

こう記述された部分で、マッシュルーム一袋とは、キノコのマッシュルーム一袋を指すのか、それとも、マッシュルームからつくった幻覚剤を指すのか、区別がしにくいということなのである。初めにこの箇所を読んだとき、キノコ的一种であるマッシュルームを一袋Baronが噛み、噛んだマッシュルームを彼女に食べさせた<sup>2</sup>と解したのであるが、果たしてそれでよいのだろうか。キノコを一袋食べる<sup>3</sup>ところが、既に不思議である。Baronはマッシュルームから作った幻覚剤で、ピーナツのような形をしているシロシビン<sup>1</sup>を、まず自分が噛み、噛んだものを彼女に食べさせた<sup>4</sup>と考える方が自然である。

われわれは、「マッシュルームの下で」を読む時に、マッシュルームといえばキノコ的一种である<sup>5</sup>と考えるだけでなく、マッシュルームから作った幻覚剤シロシビン<sup>1</sup>を想像しなければならなかったのである。したがって「マッシュルームの下で」は、キノコ的一种マッシュルームが巨大化し、その下にわれわれがいる情景を指すのではなくて、マッシュルームから作った幻覚剤シロシビン<sup>1</sup>の影響下にいるわれわれ、を指すのである。ここまでの読解で分かるのは以上のことである。

### iii. オルソンの第2回マッシュルーム体験

第2回目は、小説家兼ジャーナリストのアーサー・ケストラー (Arthur Koestler, 1905-83) にマッシュルーム体験をさせるために、オルソンが一種のせ医者 (curandero) の役割をした時の体験である。ケストラーには、『真昼の暗闇』 (Darkness at Noon, 1940) という作品がある (24)。以下、オルソンの体験談から必要な部分を抜き出してみる。

ケストラーは小男だった。誰もそのことを考慮しないが、重要な点である。彼はとても勇敢で、私と彼はしばらくの間互いに負けずに、マッシュルームの丸薬を飲んで<sup>6</sup>いた。その時の記録がある。その夜、私は記録を取っていたのだ。自分の手書き文字がページの下の方に降りて行くのがよく見えた。私は彼を導きながら、同時に彼と同じ状態にいた。というより、彼が安定した状態になるように導いて、その後は二人とも全く自由で、望むなら先へ行けるという状態になっていた。ケストラーは10錠まで飲んだと思う——懐かしいシロシビン<sup>1</sup>の8単位か10単位を——それで十分トリップできる。薬の効き目は、文字通り身

体のサイズによって決まる——量的な大きさによって決まるのである。彼は小男だった。だから10錠は14錠か15錠飲んだのと同じ効き目があるはずだ。私ならそうだ。

彼は8錠か10錠飲んだ。薬の影響に身を任せていたが、抵抗がとて強くなってきたので、とうとう一時間後には立ち上がった。集まっていたのは8名だった。彼は明らかに立ち去ろうと決めていた。そして「ジョン・ダンが言ったように、『大いなる真面目な渇きをもって、わが魂は参列す』（‘With a great sober thirst, my soul attends’）」と言うと踵を返して立ち去った。二階に行ったのだ。そこでひどい目に遭った。ケストラーが自分の部屋に入ると、一組の男女が明かりをつけずにベッドで性行為をしていた。それで別の部屋に行かなければならなかった。窓を開けることはどうしてもできなかったが、明かりはついた。それで少し気分は良くなった。(中略)それで一晩中、窓を開けることもできず、(中略)明かりのついたままの部屋にいた。どうにもならなかったからだ——マッシュルームの影響に何時間も晒されるのに十分なほど彼は昂揚していた。皆で二階へ行ったらドアをノックし、出てきて朝食を食べてくれと懇願した、バーコンなどを——われわれは一晩中、ケストラーを助けようと試みたが、彼は部屋から出てこようとはしなかった。(25-26)

以上が2回目のマッシュルーム体験である。この時、リアリーは、『蓮とロボット』(*The Lotus and the Robot*, 1960)を出版したケストラーを捕まえて実験したかったのだ(25)。オルソンとともにケストラーが行なったマッシュルーム体験(シロシビン体験)は、失敗に終わったようだ。だが、どのような失敗なのかは、正確には分らない。

オルソンが語っている時に質問が入り、ケストラーのマッシュルーム体験がどのようなものであったのかが、最後まで語られないうちに話題が移ってしまうからである。

話はウィリス・W・ハーマン(Willis W. Harman)の論文に移った。『ミュソロゴス』の編者バタリックの注によれば、その論文は『現代思想の主要潮流』XX. 1所収の「意識拡張剤の問題」である。原題および書誌データは“The Issue of the Consciousness-Expanding Drugs,” *Main Currents in Modern Thought*, XX, 1. (Sept.-Oct. 1963), pp. 5-14である(編者注203)。

ハーマンは、意識拡張剤体験の本当の3段階(the three real stages)を初めて明らかにした、とオルソンは言う。3段階と言っても発達段階ではなく、3つの具体的問題のことで、ハーマンはそれを状態(states)と呼んでいる。第1段階の人々は、自慢する。第2段階の人々は、本当に「意識拡張」体験をし、その感覚の素晴らしさを知る人たちである。第3段階の人々にとっては、「意識拡張」体験が真正の洞察(vision)なのである(26)。

#### iv. オルソンの麻薬談義

麻薬についてオルソンが語ることを聞いておこう。

##### a. 麻薬の基礎知識

飲酒による酩酊と薬物の効果との違い。飲酒では自分が大きくなったように感じるがLSDではそのような感じにはならない(32)。

アメリカにLSDが入ったのは1942年もしくは43年。シロシビンは1960年の秋である。LSDを導入したのは、マックス・リンケル博士(Dr. Max Rinkel)であった。彼はハルシノゲン(hallucinogens)によって第2段階の人々の自律神経組織(the automatic nervous system)を活性化させて、新たな体験をさせる実験をしていた。しかし、活性化させても、

感覚は、通常の、現実の、本当の性格 (a normal, real, true character of senses) まで高まるだけだった。ハルシノゲンという言葉が間違っていたのだ。せいぜい四つあっただけである。pot, mushroom, LSD, mescaline それにインディアンの言葉でいう *ololiuqui* (peyote) だが、peyote は、pot と同じだから、四つになる (33)。

これらの麻薬 (drugs) の作用はただ一つ、自律神経組織を作動させることである (they put on the autonomic nervous system, 33)。私がマッシュルームの影響を受けて体験したのはそれである。薬物は、あなたをあなた自身の自律神経組織につないでくれるのだ——内燃機関に対抗して (it puts you on your own autonomic nervous system—as against the motor, 33)。アルコールやコーヒーは内燃機関システムに向かう。

#### b. 麻薬の作用

リンケルはグロスターを訪れた時、人類に必要なのはコーヒーとアルコールだけだ、という立場をとった (33)。自分がこの国に導入した LSD のようなものの利点を憎んでいた (33-34)。リンケルは LSD を飲まなかったのではないかとオルソンは推測する。誰もハルシノゲンを飲んでいないのなら、ハルシノゲンについての話をするべきではない。アカデミックに話したところで、体験は得られないからだ、とオルソンは考えるのである。以下、引用は原文に日本語訳を添える形で記す。

[Y]ou ought to have the experience, that's all. I mean we'd be much better off, because we'd be real and we'd be comfortable, free, and we'd be true. That's the important thing. And we aren't. Because this is an artificial situation. (34)

あなた方は体験しなければならない、それがすべてだ。そうすればわれわれ皆が幸せになるだろう。なぜなら、われわれが現実になり、居心地がよく、自由で、嘘がなくなるからだ。それが、大事なことだ。だが、われわれはそうっていない。理由は、今の状況が人為的だからだ。

「薬品 (agents) の助力なしで、このような状態に至れるか」という質問に対して、できる、だが簡単ではない。人間は自律組織 (automatic system) を忘れて久しいので新米 (green) になっている (34) と考え、オルソンは言う。

You are just who you are; what you do, if it's any good, is true; and you are capable of being alive because of love. I mean it's about as simple—it's like those simplicities operate. And that's it. Well, it's not so easy to come to believe as absolutes, imperatives and universals. In fact, on the contrary, we've been encouraged to think that there is some universal, absolute or imperative which we seem to be missing out on. But that autonomic thing is very crucial. And I don't know what it means. (34)

あなたは、あなた自身であるにすぎない。もしあなたのすることが、少しでも良いことなら、あなたの行為には嘘がない。その場合、あなたは愛ゆえに生きることができる。私が言いたいのは、簡単なことだ——それは、そうしたいくつもの簡単なことが影響を及ぼすといったことだ。肝腎なのは、それだ。絶対とか命令とか普遍などを信じるのは容易ではない。事実、正反対に、われわれは捉え損ねているいくつかの普遍や絶対や命令があると

考えがちだ。しかし、自律的な物が決定的なのだ。そしてその意味が私には分からない。

再びリンケル博士の話に戻って、オルソンは以下のように語る。

...in *Time* magazine in a footnote on Rinkel, where he's quoted as saying that his belief from LSD experiment is that every cell—not every cell in the individual body, but that the cell as a principle of the structure of the human body is of an order equal to the brain. That is, that any given cell holds in itself [...] the DNA of cell structure. But the crazy thing is that he lectured to us one night in a library in Gloucester—actually to [Gerrit] Lansing and myself [...] what he said [was] what seems to happen with the hallucinogens, they go directly to the cells involved. And he made the parallelism to both the discovery of adrenalin and the power of adrenalin in the motor system—that what happens is that there's a physiological unit in the cell similar or parallel to adrenalin, which is not in, like a—I mean it comes alive, a light goes on and it comes out or it gets affected. And the cell then suddenly is both receiving and transmitting through that eye or ear thing of special existence there inherent or incident to the cell—which only occurs, not—now I suppose we have to say, not in danger, like adrenalin, but in the opposite of danger. I would say this must be the love unit, if you like, in the cell... (34-35)

『タイム』誌のリンケルへの脚注で、彼の言ったことがこう引用されていた。LSD 実験によって信ずるに至ったことは、あらゆる細胞が——個人の細胞ではなく、人間の身体の構造原理としての細胞のことだが、頭脳に匹敵する秩序を持っているということだ。すなわち、どの細胞も（中略）細胞構造の DNA を持っているのだ。しかし、驚いたことには、ある夜グロスターの図書館で彼が、われわれに——実は[ゲリット]・ランシングと私に語ったのだが、（中略）彼が語ったことは、ハルシノゲンに関して起こるように思えるというのだ。ハルシノゲンは関係する細胞に直接作用するのだ、と。そしてリンケルは、アドレナリンの発見と内臓機関組織におけるアドレナリンの力に類似があることを指摘した——起こっているのは、細胞内にアドレナリンに似ているかアドレナリンと同傾向を持つ生理学的単位があり、それは中にあるというより——生きたままやって来るのだ、光が進んで行って出てくると、影響を受けているという風に。そうすると細胞は、細胞内に初めからあったか、あるいは細胞内に生まれて存在するようになった、特殊な存在の眼や耳を通して、突然受け取ったり、渡したりするようになる——それは起こるだけであって——アドレナリンのような危険はないと言っておかなければならないだろう。むしろ、危険とは正反対である。これは、お望みならば、細胞内の愛の単位と言えるものに違いない.....

（中略）は、平野。[ゲリット] は、バタリック。

「愛の単位」(the love unit) という言葉がここで唐突に現われる。オルソンはマッシュルームを始めとする麻薬を、愛に関連するものとして捉えているようだ。ではオルソンの言う「愛」は、麻薬のどういう働きを指しているのだろうか。鍵になる文を見ておこう。

#### c. 愛と麻薬

Now I'd like to close my remarks, and so we can throw the whole thing open, is to read you



the one statement in this which is really something I can verify and is the one that is considered the mystical statement of stage three. And you'll see what I found out about the mushroom when I woke up. What I said to Leary and Ginsberg is simply what this guy records. One individual writes: "During this stage...comes that experience called by the mystics 'the realization of the God within us.' This comes to many under these drugs, and is an indescribable, piercing, beautiful knowledge and *knowing*, which goes beyond the body, the mind, the reason, the intellect, to an area of *pure knowing*." I mean we could knock the words about for a long time, but...[continues reading] "There is no sensation of time. God is no longer only 'out there' somewhere, but He is within you, and you are one with Him. No doubt of it even crosses one's awareness at this stage. You are beyond the knower and the known, where there is no duality, but only oneness and unity, and great love. You not only see Truth, but you *are* Truth. You *are* Love. You *are* all things! It is not an ego-inflating experience, but on the contrary, one which can help one to dissolve the ego. (36-37)

さて私はコメントを止めて、すべてをオープンにしようと思う。あなた方に、ある報告を読み上げようと思う。その報告書には私が確かに証明できることが書いてあり、第3段階の神秘的報告だと考えられるものだ。そうすれば、私が目覚めた時、マッシュルームについて知ったことを、あなた方も知ることになるだろう。私がリアリーとギンズバーグに語ったことは、この人の記録と同じである。この人物は書いている。「この段階にいる時.....神秘家が言うあの体験が訪れる、『われわれの内部に神を実感する』体験が。この体験は麻薬の影響下にある多くの人に訪れる、表現しようのない、突き刺すような、美しい知識であり知ることなのだ、その体験は、肉体を越え、精神を越え、理性を越え、知性を越えて、純粋な知の領域に至る」。われわれは長い間色々な言葉を試してみたのだが、しかし.....[読み続ける]「時間の感覚はない。神は、もはや単にどこか『そこに』いるわけではなく、神はあなたの内部にいて、あなたは神と一つになっている。この段階では、どんな疑念も意識をよぎらない。あなたは、知る者と知られる者を超えており、そこには二重性はなく、ただ一つであることと統一性、そして大いなる愛がある。あなたは真理を見るだけではなく、あなたが真理になっている。あなたが愛だ。あなたは、あらゆる物なのだ！これは自我を膨張させる体験ではなく、その正反対で自我の溶解を助ける体験なのだ。

オルソンは自分がティモシー・リアリーとアレン・ギンズバーグに語ったことを語るのではなく、マッシュルーム（シロシビン）体験をした人物の報告を読み上げている。他者の報告を用いるのは、体験の共通性を示すためであろうと思われる。報告の中では、（１）神が自分の中にいることをまざまざと感ずること、（２）肉体や精神を超えて純粋な知の領域に至っていること、また（３）神と一つになっており、大いなる愛があること、（４）あなたは真理を見るだけではなく、あなたが真理で、あなたが愛であり、あなたは、あらゆる物であるといった、究極の愛の領域に入った人の感覚が伝えられている。マッシュルーム体験が、上のような感覚をもたらすならば、愛の体験であると言っても過言ではない。ほとんど神秘家に等しい体験をしたこの人物の報告に、われわれはもうしばらく耳を傾けることにしよう。

The consciousness or awareness is expanded far beyond that of the normal state. And this level of consciousness, which actually is available to us at all times, is found to be that part of us which, for want of a better way to express it, might be called the 'God-ness' of us. And we find this 'God-ness'

is unchangeable and indestructible, and that its foundation is Love in its purest form....Utilizing this inner Self as the working basis of your life, you realize fully that nothing could ever hurt you or bother you, not even death. It gives life a completely new meaning, and one which is indestructible, and which fits in with the scheme of things. You no longer find yourself an outsider, separated from Nature and separated from God, and separated from your fellow beings.” (37)

この意識あるいは認識は、通常の状態のそれよりはるかに拡張している。そして、この意識レベルは、実はいつでも利用可能な、我々の一部であることが分かるのだが、よりよい表現がないので、我々の「神＝性」と呼んでおくことにする。するとわれわれは、この「神＝性」が不変で不滅であることを知る。そして、その基礎となるのはもっとも純粋な形態における愛であることを知るのである.....この内部の自己をあなたの人生の作業基盤として用いると、あなたは何物もあなたを傷つけることができず、煩わすこともできないことが分かる、死さえも。それは人生にまったく新たな意味を与える、破壊されることのない人生だ、そしてその人生は事物の機構にぴったりと当てはまっていく。あなたはもはや自分を局外者と思いはしない、自然から切り離され、神から切り離され、同胞から切り離された局外者ではないのだ。」

ここでは、一つ前の引用の（１）、（３）、（４）が中心主題になっていることが分かる。すなわち、（１）神が自分の中にいること、（３）神と一つになり、大いなる愛があること、（４）あなたが愛であることの３点である。この意識レベルをさらに要約すれば、「あなたが神と一つになると、愛そのものになる」と定式化できる。

今、われわれが見ている引用では、神と一つになり愛そのものとなった場合に、自らの持つ「神＝性」も、愛も破壊されないことが強調されている。そうであるなら、人生は確固としたものになり、いかなる障害によっても悩まされることがなくなる。死でさえも恐怖的ではなくなるのだから。

この報告を書いたのはウィリス・W・ハーマンであり、意識拡張剤体験を可能な限り理性的な言語にすれば、ハーマンの報告になると、オルソンは言う（37）。「意識拡張体験の確かな真実や愛だと私に思えることを要約してほしいと言うのなら、ここに既に書いてある」（if you need a capsulated statement of what seems to me to be the real truth, or love, of the thing, there it is）と言うのである（37）。

そして、「あなたは、その３段階を経験したのですか」という問いに対してこう答えている。

That's what I happened to get. That's why I said, when they asked me, I said it's a love feast and a truth pill, the mushroom. Well, this fellow must have been just similarly—he went on the same way like I did. There's nothing there, except for the sort of juiciness of the language, that's not perfect. (37)

私は偶然その体験をした。だから聞かれたときに言ったのだ、それは愛の宴で、真実の丸薬で、マッシュルームだと。この人物〔ハーマン〕も全く同じだったに違いない——彼は私と同じ道を辿ったのだ。そこには何もなくて、あるのは一種の扇情的な言語だけ。完全なものではないのだ。

このオルソンの言葉には、ハーマンの記録を引用して語った時（本論40-42頁）の熱情がない。様々な限界を突破していき、ついには神の領域にまで達したハーマンの意識の記録を読み上げていた時のオルソンには、自分が読み上げている内容に対する信頼があった。その熱情や信頼が、ここでは感じられないのである。神が自分の中にいる感覚を肯定したはずのオルソンは、ほとんど投げやりに言っているように見える。「それは愛の宴で、真実の丸薬で、マッシュルームだ」と。

しかし、われわれはオルソンの急激な態度の変化に驚くよりも、意識拡張剤を体験したハーマンが「何もない」中で言語を作って行ったことの方を重要視しなければならない。なぜなら、ハーマンの神や愛との合一の記録は、創作だったのだから。体験それ自体には「何もなく」、体験を記述する「扇情的な言語だけ」があった。ハーマンは、純粹知の領域、神、愛、合一などの語を当てはめながら、意識拡張剤体験を記録したのである。体験を記録したというよりは、体験を記録する言語を組み合わせ、組み合わせた言語で体験を創作したのだ。

おそらく、ハーマンの記録そのものよりも、ハーマンの記録がどのような過程を経て出来たのかを語るオルソンの言葉の方が重要なのだと思われる。

#### d. 麻薬の平和利用

「様々な幻覚剤があるが、その効果は同じなのか」という質問に対して、オルソンは「まったく、その通り。昂揚している時間の長さが違うだけだ」と答えている（37-38）。

また、グラトウィックが「麻薬によって平和をもたせたら、予想に反していたろう」と言う、オルソンは「マッシュルームの実験は初めの中は平和目的だったが、今はその目的で実験を行うことはなくなった。しかし、リアリーは、この10年間はマッシュルームの10年で、すべての人が麻薬体験に魅せられて平和が訪れる（if we didn't get peace from turning everybody on）のでなければ、人類は破滅すると主張している」（38）と応じている。

麻薬の平和利用に関連するフレーズの定義を挙げておこう。“turn on, tune in, drop out”「しびれて目覚めて抜け出せ」は、1960年代のカウンター・カルチャーでLSDを若者に奨励するスローガン；「薬をやって、カウンターのカルチャーの環境に波長を合わせ、社会から脱落せよ」というほどの意味で、ヒッピー文化の教祖的存在であったTimothy Leary（1920-96）が60年代に行った講演中に述べた言葉に由来する。上述の定義は、『リーダーズ英和辞典』第2版に拠った。

#### v. 2度のマッシュルーム体験を再度語るオルソン

オルソンは、麻薬の影響下にあったのは「生涯で2度だけであるが、マリファナを何度か吸ったのは数に入れていない。その2度は、マッシュルームの影響下にあった（and that's twice under the mushroom, 39）。LSDを使ったことはない」と言う（39）。次いで、以下のように語る。

[T]he first time I took the mushroom I went into a big longhouse take [...] I, under the mushroom was absolutely a peace sachem holding, as chief, a longhouse ceremony, and I said it in so many words. It came popping out of my mouth. The moment the peanuts affected me I started talking longhouse talk. And created—because I was the responsible person—I was the victim, or whatever you want to say, in that instance. I was the tone, I created the tone of the evening. And it was absolutely a pure ceremonial set. (39)

私が初めてマッシュルームを服用したときは、大きなロングハウスでの試みであった。(中略) マッシュルームの影響下にあった私は完全な平和首長になっており、族長として、ロングハウスの儀式を執り行なっていた。たくさんの言葉を使って儀式を行なっていた。言葉は私の口からぼんぼんと飛び出してきたのである。ピーナッツが私に影響力を及ぼした瞬間、私はロングハウスの言葉を話し始めたのであった。そして創り出したのである——私が責任ある立場にあったから——その時には私は犠牲者だった、あるいは、あなた方が何と呼んでも構わないが、私は音調<sup>トーン</sup>だった、私はその夕刻の音調を創り出したのだ。それは完全に純粹な儀式の装置だった。

ここで用いられている「ロングハウス」(longhouse)という語は、イロコイ族や北米インディアンの木造、樹皮張りの長屋を意味する。そこでオルソンが1回目のマッシュルーム体験をしたというのか、あるいはマッシュルーム体験の幻覚の中で、ロングハウスの中に入って儀式を行なったというのかは、必ずしも定かではない。

しかし、この箇所は、すでに一度語りかけたが、語り終えていないマッシュルーム体験を今一度詳しく語っているものと考えられる。第1回目のマッシュルーム体験と照らし合わせると(本論36-37頁)、場所はグロスターにあるオルソンの家である。だから、「ロングハウスの中に入って行った」は、マッシュルームによる幻覚体験だと考えられる。また「ピーナッツ」(peanuts)は、既に見た言い方で、マッシュルーム丸薬(シロシビン)のことである(本論34-35頁)。

「あなたと一緒にマッシュルームを服用した他の人たちは、あなたと同じような体験をしたのですか」という質問に、オルソンは以下のように答えている。他の人たちとは、ティモシー・リアリーとアレン・ギンズバーグである。

They partici[pated]—But you see, the great experience of this is you're individual. Like this guy says, your ego goes and your self is on. So everybody is themselves. There's no, there's none of the social problem. There's none of the individual problem either. There isn't the ego or the rational or even what we're doing here, which is sitting and being intellectual about it. It's in—it's soul, that's all! It happens to be, that's all. (39)

彼らは参加したのだ——だが、この体験の素晴らしいところは、あなたが個人だということだ。この男が言うように、あなたの自我は去り、あなたの自己が残るのだ。だから皆が自分自身になる。社交上の問題は全くない。個人としての問題もない。自我や理性がなくなる。我々がここでしていることも。それは、座って、麻薬体験について知的になっていることだ。麻薬体験がある所は——それは魂なのだ、それが全てだ！ 偶然そうなったのだ、それだけだ。

オルソンは極めて朴訥に答えている。「この男」とは、マッシュルーム体験を素晴らしい宗教的体験として語ったハーマンを指すだろう(本論40-43頁)。オルソンの答が、ぶっきらぼうなのは、この「知的」な場に対する違和感のためであるように思える。マッシュルーム体験について、自分が話をし、それをグラトウィックの知的な集団が聞くという設定にオルソンは、嫌気がさしているようだ。自分で体験することを避けて、他人の体験を聞くことによって、知識を増そうとする、この集団の用意した場は「人為的」(本論39頁)である。オルソンは、こういう手合いには語る方法を持っていないように見える。

『マクシマス詩篇』「手紙 23」(“Letter 23” *The Maximus Poems* 104-105) では、「おれは、語られていることの証拠を／自分で探すヘロドトスのような歴史家／でありたい」(“I would be an historian as Herodotus was, looking / for oneself for the evidence of / what is said”)とされ、さらに『ミュソロゴス』の「詩と真実」(“On History” *Muthologos* I, 3) ではヘロドトスとツキュジデスは以下のように対比されていた。「ヘロドトスは、歩き回って、発見できるあらゆるものを発見し、それから語る人」(“Herodotus goes around and finds out everything he can find out, and then he tells a story”)である。他方「ツキュジデスは、基本的に出来事を報告する人」(“Thucydides, who basically is reporting an event”)である。

グラトウィックとその集団に欠けているのは、体験してみるという態度である。彼らとはいくら話しても、話がかみ合わない。図式的に言えば、彼らはツキュジデスであろうとする人たちで、オルソンとその仲間ヘロドトスであろうとする人たちなのだ。語っても通じない相手に向かって語るオルソンの口調が、朴訥になるのも無理はない。ヘロドトスとツキュジデスに関して今引用した箇所は、グラトウィックの集団には語る術がないと言っているに等しい。

次の質問「あらゆる自己は、ロングハウスに所属するのですか」(Does every self belong in a longhouse? 39) は、すでに滑稽の域に入っているとみるべきだろう。「ロングハウス」はオルソンが幻覚の中でみた場所なら、一緒にマッシュルーム体験をしたギンズバーグやリアリーの自己はどうか、と質問者が聞いたかったことは分かる。しかし、同じ場所で同じマッシュルームを服用したからといって、同じような幻覚を見るとは限らない。むしろ、一人一人が違う幻覚を見ると考えられる。麻薬を吸っても「個人」は「個人」であると明言されていた(本論44頁)。だから、集合的な体験を考える方が異様なのだが、この質問者はそうは考えない。同じ場所で同じマッシュルーム体験をしたのなら、同じ幻覚を見ると考えるのだ。

別の質問がなされる。「マッシュルームの影響をうけていると人は自分の無意識的自己が知っているよりも多くのことを知っている気になるのですか？」(I was just wondering if under the mushroom one has a feeling of knowing more about one's own unconscious self? 41) と。これに対してオルソンは質問を少しはぐらかすようにこう答えている。

Completely. Completely. I would—I thought if we could do the other things—I actually myself am a poet. I'd be perfectly happy to read you some poems that are, from my point of view, examples of what the so-called experience of the mushroom is, as well as how action for any person, when it's their own, is going in the direction of revealing this, this whatever this is that we say is true. (41)

全くです。全く。私はその気でした——私たちは他の事が出来るのではないかと思ったものです——実は私は詩人です。あなた方に詩をいくつか読めば、私は申し分なく幸せになるでしょう。その詩は、私の観点からすると、いわゆるマッシュルーム体験とはどんなものかの実例です。ちょうど、ある人の行動がその人自身の行動であるとき、このことを顕す方向に進んでいくのと同じです。このこととは、何であれ私たちが話すことは真実だということです。

別の質問に対して、オルソンは「どうしたら信じてもらえるかどうか分からないけれど、それには、あなたがハルシノゲンの影響下に入らないと無理です」(I don't know how to give you the conviction there, unless, say, you just gotta put yourself under an hallucinogen, 41) と答えている。こ

の答えは、本論44頁の朴訥な答えや、本論39頁で体験してみなければ分からないと答えている回答と全く同じである。

オルソンは、既にこの座談で自分が果たす役割に限界があることに何度も気が付いている。体験していない者に向かって、語っても納得してもらえないなら語ることは無意味である。体験しなければ分からないという意味のことをオルソンが、グラトウィックの知的な集団に向かって言明するのは、これで3度目になる。いかに知的な集団であっても、3度にわたって、自分たちのしていることが無理であることを表明されたら、知的な探究をどこかで止め、マッシュルームやハルシノゲンの影響下に自らを晒してみるか否かに話は進みそうなものなのだが、そうはならない。グラトウィックの集団からは延々と質問が出てくる。

たとえば、幻覚剤の使用と供給が違法になったことをオルソンが嘆くと (The actual supplies have become criminal. It's a very terrible thing that's happened, 41), 「そんなことになったのは何時ですか」(When did that come about?) という質問が出る。オルソンの答えは以下のとおりである。返答は長いので半分に区切った。

Oh, it's been tripped [tricked?] out. Sandoz is—who stopped Sandoz manufacturing psilocybin? Who stopped the manufacture of LSD? One has only one guess. The companies were threatened, if they didn't, that's all. By obviously—well, like you can start with the Food and Drug Administration. They must be the operators in the field. Somebody here must be much more knowledgeable of the recent events of this thing than I am. I was surprised, for example—I got to Vancouver this summer, and a kid had written to me from Alaska, from Seal [i.e. Sand] Point, and asked me—through the mushroom people...They knew I was going to be in Vancouver and he'd written to them saying that he'd like to go into a drug session. And they wrote back and said, well get Olson, who'll be in Vancouver. And he went around picking up all the Heavenly Blue. And immediately the Royal [Canadian] Mounted [Police] got—was aware. And they sent a guy to say to this kid, "Look, either get out of town or we'll pick up your Heavenly Blue." And he came to me rather disturbed. I said I don't want to go under the damned thing—I said I haven't got the time. (41-42)

混乱してしまった「騙されて廃止にされた」のだろうか？ サンドスは——誰がサンドスにシロシビン製造を止めさせたのだろうか。誰がLSD製造を止めさせたのだろうか。一つの仮説が成り立つ。その会社は脅されたのだ、もし製造を止められたのでないなら。それだけだ。しかし、まずは食品医薬品局から始めるのがよいかもしれない。そこがこの方面を取りしきっているに違いないから。この件に関しては、ここにいる誰かの方が私より最近の事情に明るいに違いない。一例だが、私はびっくりしたことがある——この夏ヴァンクーヴァーへ行ったのだが、一人の少年が私あてに手紙を書いてきていた。アラスカの、あざらし〔<sup>サンド</sup>砂〕岬からだった。少年は私に尋ねていた——マッシュルーム体験者から聞いたのだろうか…体験者たちは私がヴァンクーヴァーに行くのを知っていた。少年は彼らに、麻薬パーティに参加したいのだと手紙を書いていたのだ。彼らは少年に対する返事として、オルソンに会え、ヴァンクーヴァーに行くはずだ、と書いた。少年は、あちこち探してヘヴンリー・ブルーを皆あつめた。すぐに〔カナダの〕王立騎馬〔警察〕が——察知した。警察は少年のところへ人を遣わして、こう告げさせた。「いいか、この町からすぐ出て行くのだ、さもないとそのヘヴンリー・ブルーを没収するぞ」と。少年は、困惑して私のところへ来た。私はそんな下らない物の影響を受けたくない——時間がいないのだ、と私は言った。

ここで述べられていることは3つである。(1) サンドスはどこかから脅されてシロシビンやLSDの製造を中止した。脅したのは食品医薬品局らしい。(2) 麻薬パーティへの参加を熱望するアラスカ出身の少年から、オルソンはヴァンクーヴァーで手紙を受け取った。ヘヴンリー・ブルーを集められるだけ集めていた少年は、騎馬警察に立ち退きを勧告されており、動揺していた。(3) 少年は助けを求めたが、オルソンは、ヘヴンリー・ブルーの影響を受けている時間がないと言って、取り合わなかった。以上である。続きを見ることにしよう。

You see, it's nine hours in the session and then the next day you're rather—they say, they tell me that under the morning-glory seed, like LSD, the next day you really are—you've got a big ripple. You have a big ripple under the mushroom the next day— and in fact, by the way, to be fair, to tell the opposite side of the Koestler thing, the next day after the session, I was—my nerves—my neural, my whatever, aggressive—don't think so, but that's the way he described me in the London newspaper—as a *horrible* American hot-rod gunman! [General laughter.] So maybe it was true, because the next day I backed my Pontiac into a brand-new Cadillac right in front of the Personality Center. And I billed the Personality Center for seventy-five dollars for repairs. Because I said I'm transporting your host's customer and he's given me such a terrible day after the mushroom that all the benefits of benefit have been lost! Here I am trying to drive an automobile, and this idiot—and I backed right into a lovely new Cadillac. (42)

お分かりだろうが、麻薬による幻覚症状が9時間続いた翌日は、誰だって——人が私に言うには、アサガオの種の影響下にあると、LSDのように、翌日は本当に——大きなさざなみ (ripple) に襲われる。マッシュルームの影響下にあった翌日も、大きなさざなみに襲われる——ところで、実際、公平を期すためには、ケストラーの場合とは正反対の状態を言わなければならない。麻薬による幻覚症状の翌日、私は——私の神経は——神経系は、私の何でも構わないのだが、私のそれは攻撃的になっていた——私はそう思っていないが、ロンドンの新聞記者の記事によればそうなのだ——恐ろしいアメリカの暴走族ガンマン！ [一同笑う。] それが正しいかもしれない。なぜなら私は自分のポンティアックをバックさせたとき、パーソナリティ・センターの前で、真新しいキャディラックにぶつけてしまったからだ。私は、修理費の75ドルをパーソナリティ・センターに請求した。理由は、あなた方のホストの顧客を私は運んでいたのに、彼が私にくれたのはマッシュルームの後のそれはひどい一日だった。そして利益は何かも消えてしまった！ ここで私は自動車を運転しようとしているが、この馬鹿者を——バックさせたら、美しい新車のキャディラックにぶつけてしまったのだ。

ここで書かれている内容は2つである。(1) 麻薬による幻覚症状の翌日、一般にどのような状態になるかということ、(2) オルソンの場合は、ケストラーが部屋から出てこなかった(本論37-38頁)のとは正反対で、攻撃的になっており、自動車をバックさせる際に誤って新車のキャディラックにぶつけてしまった。修理費はパーソナリティ・センターに請求した。

この後半部は、前半部(本論46頁)から直接つながっているのに、そうとは思えない。あたかも、この後半部は、生涯で2度だけした麻薬体験(本論43頁)を補足して語っているかのようなのである。語ると言った以上は、語っておくという意志に基づいて語っているところが特徴的である。話の流れに乗って語るのではなく、流れを無視して語っているのだ。だから、き

わめて不自然な語り方になっている。しかし、オルソンは不自然であろうとなかろうと、マッシュルームの影響下にあったことが生涯で二度あると言った以上、一度目の体験（本論36頁）を補足的に詳述し（本論43-44頁）、二度目の体験についても（本論37-38頁）ここで詳しく述べているのである（本論47頁）。

「さざなみ」(the ripples) について、こんな質問が出る。「さざなみが引いた後でもあなたはマッシュルーム体験と繋がっているのですか？」([W]hen the ripple has expired, are you still connected to the experience? 43)。これに対するオルソンの答えは「その通りだ。おお、あなた方に話している今でも、私はその体験の中にいる」(Oh yeah. Oh boy. Right now as I talk to you I'm still right there, 43)。

以上がオルソンの語るマッシュルーム体験であるが、この座談中にグラトウィックが麻薬と創造性に関する質問をする興味深い場面があるので、それを再現しておこう。その際、語り手と語る内容の区別がしやすいように、本文を7字分ほど右へ移動してある。以下、語り手と語る内容の入った引用をする際は同様の処置をする。

#### vi. マッシュルーム体験と創作

Gratwick: Has it affected you as a creat[ive man in] your work?

Olson: No, not at all. In fact, that's one of the bullshits of this whole cre—this whole creativity thing is one of the things that ought to be kicked in the face. I think it's none of the unconscionable social products of this stuff, this whole creativity talk. (44)

グラトウィック：マッシュルーム体験は創作家としてのあなたに作品の中で何らかの影響を及ぼしましたか？

オルソン：いや、全くそんなことはない。事実、それはこの創——創造性全体に関するたわごとの一つだ。この創造性ごっこ全体の顔面に蹴りを入れてやるといい。マッシュルーム体験は、このあくどい社会的産物、すなわち創造性に関する話の全体とは何の関係もない。

グラトウィックは、芸術作品の創作とマッシュルーム体験との間に何らかの繋がりを見出そうとして、オルソンに質問していることは明らかである。ところが、オルソンの反発は激しい。「たわごと」(bullshits) や、「創造性ごっこ」(this whole creativity thing), 「顔面に蹴りを入れてやるといい」(ought to be kicked in the face) などの暴力的ともいえる言語で、オルソンはグラトウィックの想定を全面的に拒否している。

オルソンの話を詳しく聞こう。

[Y]ou know, creation is man's *work*. Ah, you got to be hard-boiled about that word. It sounds like juicy and wonderful and all that, but in fact all it is is that you do, and can do, what you propose to do. It's as solid as that. And to start to call it something is one of those—gee, aren't we a society and a nation that would just do that today—call it creativity, call it culture, call it technology, call it art. I mean *agh!* I mean at *this* date? This is just what we need not one inch more of! The less the better! Because of the very things that have brought us to the point where we're on. And it's gonna



kill the thing as sure as the letter killeth the spirit. Here it is, again. (44)

分かるね、創造は人間の仕事だ。あなたは、創造という言葉について厳格になる必要がある。その言葉は、元気がいいとか、素晴らしいとか色々に聞こえるが、実はその全ては、あなたがすること、あなたに出来ること、あなたがしようとする事なのだ。そういう確固たるものだ。それを次のような別の言葉で呼び始める——われわれはまさに今日そういうことをする社会であり、国家なのではないか——創造性とか、文化とか、テクノロジーとか、芸術と呼ぶのだ。つまりウァッ！だ。この時代に！そんなものはこれ以上一インチだって要らないのだ。少ない方がよい！なぜかと言えば、まさにそういうことが、われわれを現在の地点まで運んできたからだ。そして、それが大事なものを殺そうとするのだ、文字が精神を殺すように。またしても同じ所に来た。

オルソンの話の要点は一つである。創作は人間が行なう仕事であって、マッシュルーム体験とは何の関係もない。関係があると想定する思考方法が、大切な物を殺していく。マッシュルーム体験に何か別の物を持ち込むことは、粗雑な思考法をはびこらせることになり、創作の敵になる。こういった意味のことをオルソンは、グラトウィックとその知的な集団に向かって語っているのである。

ここまでで既に気が付くことであるが、グラトウィックとその仲間は、オルソンとは正反対の立場に立って物を考える人々であるらしい。オルソンは、思っていることを語っても、彼らに理解されるとは思っていないだろう。われわれには、なぜオルソンはこの場で語り続けるのか不思議に思えるほどである。

## vii. 硬い科学と柔らかい科学

しかし、オルソンはさらに語る。

[N]ow we're in a stage of hard science which is purely an investigation of active states. Now what are you going to do with soft science—which isn't soft at all but which is *the* science. What did you call them, the rejected sciences? We used that word as of the work that Arthur Young went into after having been an engineer—an engineer or an inventor—when he writes about things that I would call—business that I spent my life on—like mythology. That's a soft science, if you like. It's soft because it's literary or something. Bullshit. It's the same hard as that hard, only we don't know that, we've had no—we're just beginning to start again on that experience. I don't mean that experience, but I mean on the discourse, the language we use in that area of knowing. (46)

現在、われわれは硬い科学の段階にいる、純粋に活動状態を調査する科学だ。柔らかい科学などしてどうするというのだ——だが、柔らかい科学は全く柔らかいのではない、それどころか、それこそが科学なのだ。あなたは、柔らかい科学を拒絶された科学と呼ぶのか。われわれは拒絶された科学という語をアーサー・ヤングが技師——技師もしくは発明家——であることを止めた後に没頭した仕事に対して使った。それはヤングが、私に言わせれば——私が一生をかけた神話学——のような事について書き始めた時のことだ。お望みならば、そういうものを柔らかい科学と呼ぶといい。柔らかいのは、それが文学か何かだからだ。下らない。それは十分硬いものだ、われわれに分らないだけだ。われわれは全く——われわれは、あの体験を再びし始めたのだ。麻薬体験ではなく、論議のこと、知の

領域でわれわれが使う言語のことを言っているのだ。

バタリックの注によれば、アーサー・ヤングはベル・ヘリコプター (the Bell Helicopter) の発明者で、フィラデルフィア郊外の納屋で仕事を進めていた。ヤングのデザインしたヘリコプターをベルが製作し始めた時、生産するヘリコプター機ごとに特許権使用料をヤングに払った。ヤングはこの後、十分な財力を以て心理学や神話の研究にとりかかった。フルネームはアーサー・M・ヤング (Arthur M. Young) である (207)。

ここでわれわれが出会うオルソンは、マッシュルーム体験をしようとしなくて、他者から体験の有様を聞き出そうとするグラトウィックとその知的な仲間に対して、十分愛想をつかしながら、まだ語ろうとするオルソンである。この引用で大切なことは、この座談が行われている頃に硬い科学として信奉されたものが、本当に信奉されるべきものかどうかについて、オルソンが疑問を呈していることである。柔らかいと見えた文学その他が、十分に硬いことを語るとともに、その例としてオルソンは科学技術の世界から、神話の世界へ足を踏み入れたアーサー・ヤングのことを語っている。

ここにも、最も話が通じにくい型の人々に対して、どうにかして最低の意思伝達はしておこうという構えが見える。また、その構えに無理があることも同時に見て取れるのだが。

#### viii. マッシュルームに関わった学者たち

メキシコ先住民のアステカ族 (the Aztecs) が、マッシュルームを「神の肉」 (“God’s meat”) と呼んだと説明した後 (50), オルソンはマッシュルームに関わった麻薬学者を 4 人挙げる。一人は既に言及されたティモシー・リアリー (Timothy Leary) である。オルソンはリアリーを「麻薬集会の指導者の中で、西洋で一番、アメリカで一番、あるいは北米で一番訓練された人の一人」 (He’s one of the best, probably one of the best trained Western or American or North American leaders of a session, 50) と高く評価するが、「大学を解雇されたのちは、悪名高い人になってしまった」 (Leary, the guy who got fired by—the man who has now become a *notorious* person, 50) と言う。

二人目はアラン・ワッツ (Alan Watts) である。「ワッツはサイケデリック運動の神学者の一人で、ジェラルド・ハード (Gerald Heard) やハックスレー (Huxley) とともに活動していた」 (Watts as you know is one of the theologians of the psychedelic movement, along with Gerald Heard, Huxley, 50)。もう一人はマサチューセッツ工科大学にいたヒューストン・スミス (Huston Smith) である (51)。「この 4 人は本物だった...毎週月曜の夜に集まっていた。私も五番目の車輪になるよう参加を求められたことがあった [笑う]」 (Those four are the real...They meet every Monday night in a—I was asked one night to go as the fifth wheel [laughs], 51) とオルソンは語っている。この 4 人とは、「島」 (the islands or something, 50) と思われるところへやられたリアリー以外の、アラン・ワッツ、ジェラルド・ハード、オルダス・ハックスレー (Aldous Huxley)、ヒューストン・スミスだと考えられる。

しかし、詳しく語られるのは、アラン・ワッツとティモシー・リアリーの二人である。以下、この二人について見ておこう。

##### a. アラン・ワッツ

では、アラン・ワッツの行状はどうであったのか。座談参加者の「声」とオルソンとのやり

とりを見ておこう。

Voice: Well, the thing that disturbs me about this—this experience has gotten into the realm of, you might say, the common man's gossip and it never should have been allowed. Why has this happened? Why have these people let this get out? Now of course it leaked out of Harvard via students apparently—

Olson: Go on! A whole gang, a bunch of criminals moved in. Sure, they were selling LSD, laced sugar cubes of LSD for a buck. And the kids were just gobbling it up. The black market operations—I could answer you on Watts very simply. Alan—I said to Alan last spring in Gloucester, “You really want to be a member of the syndicate.” He does. He's ragged, he's going ragged as a human being because he really wishes to be a member of the syndicate. And I say, “Why don't you become the drug boss, drug peddler of the syndicate? You're knowing on the mystical area, you're knowing on the theological area, you're competent within the group—why the hell don't you go, why don't you go”—go what? What do you call it?

Voice: Go commercial.

Olson: Go commercial—right, absolutely. He really is, and it's showing up badly. His reporting gets worse and worse. Worse and worse. (52)

声： 気になって仕方がないことがある——この「マッシュルーム」体験は、一般人の噂話に上る領域に入ってきた。そんなことは許されなかったはずだが、一体どうしたのだ。どうして関係者は、漏らしたのだ。もちろん、学生を通じてハーヴァード大学から漏れてきたのだろうが。

オルソン： 続けてくれ。悪漢たちが皆、犯罪者の一味が我も我もと入り込んできた。確かに、彼らは LSD を売っていた。角砂糖に LSD を加えて、1 ドルで売っていた。だから学生たちは、呑みこみさえすれば良かったのだ。闇市のやり方だ。ワッツについてなら、簡単に答えられる。アランには、昨年の春グロスターでこう言った。「君は本当はシンジケートの一員になりたいのだろう」とね。彼はなりたがっている。ワッツはぼろぼろだ。人間としてぼろぼろになっている、その理由は、本当にシンジケートの一員になりたがっているからだ。それで私は言った「麻薬のボスになれば良いのに、シンジケートの麻薬売りに。君は、神秘的な領域のことを知っているし、神学的な領域のことも知っている、グループの中で引けを取らない——やれば良いじゃないか、やれば」——だが、何を？ どう言えばいい？

声： 商売をする、だ。

オルソン： 商売をする——確かに、その通り。実際ワッツは商売をしていた。そして、それがひどく目立つようになった。彼の報告は、どんどん粗雑になっている。悪化しているのだ。 [ ] は平野。

オルソンは、アラン・ワッツの陥った状態について以下のように述べている。

I had said that Alan Watts' condition as a human being is deteriorating because he himself has a heroism of the criminal man, and he hides it. And actually, in fact, I was simply suggesting a way that

he could implement his own entrance into the syndicate, was to become the drug—the pusher—of the syndicate. In the new activism, by the way, see? One of the reasons why the whole thing blew up was that we have no activism, literally, except the session. That's why I say to you, this is an idle thing to be doing tonight except that we should be under the drug, that's all. (53)

私はアラン・ワッツの状態が、人間として、頹廃していると言った。その理由は、ワッツ自身が犯罪者の英雄的資質をもっており、それを隠しているからだ。実際、私は、ある方法を示唆しているだけだ。シンジケートに入る手段をワッツが手に入れる方法だ。彼自身がシンジケートの——麻薬に——売人になるのだ。ところで、新しい直接行動主義では、どうかね？ 全体が吹き飛んだ理由の一つは、われわれにあった直接行動は、集まって麻薬を吸うことだけだったからだ。だから、あなた方に言うのだ。今夜こうして集まっているのは、われわれが麻薬の影響下にいないなら、空しいことだと。それだけだ。

b. テイモシー・リアリー

テイモシー・リアリーについてオルソンが語ることを聞こう。

But if you're talking in terms of creating agency, which he is—Leary, for example, wants very much to create social and political agency for the drug. That's really what he wants to do. He believes, as I've said to you, this is the decade of the mushroom (now he believes that this is the century of the psychedelic). But it's work to be done and he can do it. (54)

しかし、もしあなたが創造機関に関して語っているなら、それこそ彼が——たとえばリアリーが麻薬のための社会的政治的機関を一生懸命に創ろうとしていた。それが彼の本当にしたいことだった。あなた方に語ったように、リアリーはこの十年がマッシュルームの十年だと信じている（今は、この世紀がサイケデリックの世紀だと信じているが）。しかし、その仕事はなされるべきで、彼にはそれができる。

テイモシー・リアリーについては、職場を首になった後「島」へやられたとされているが（本論50頁）、オルソンは変わることなく彼の信条と活動を支持している。マッシュルーム（シロシビン）を始めとする麻薬を、営利目的以外で用いることにオルソンは賛成しているのだ。まっすぐは進まず、行ったり来たりするうちに、しばしば脱線するこの座談で、この点だけは一貫している。

われわれは、座談の最後の局面に入ろう。

ix. 最後のマッシュルーム談義

オルソンは語る。

The advantage of the attention is that great thing, that we select. That is why, for example, in a room under the mushroom, believe you me, like I say, what everybody does, is, and says is pure, pure utterly marvelous divine existence. In other words, that the experience outside is definitely identical with the experience inside. If I hear some of you, if I hear you say something, you happen to say exactly what you should say. That gets to be terrific! (60)

注意力の利点は、大きなものだ、われわれは選択するから。だから、たとえばマッシュルー

ムの下の部屋にいと、私の言うことを信じて欲しいのだが、あらゆる人のすることが、そして語ることが、純粹になる、純粹でまったく素晴らしい神々しい存在になるのだ。言い換えると、外側の体験が内側の体験と完全に等しくなる。あなたの言葉をいくらか聞けば、あなたが何か言うのを聞けば、あなたはまさにあなたが言うべきことを言っている。それは素晴らしいことだ！

「マッシュルームの下部屋」は、マッシュルームの影響下ある人たちが集まっている部屋の意味であろう。そこでは、行為や発言が純化され、神聖になるとオルソンは言う。ここでも、オルソンはマッシュルーム（シロシピン）使用には全面的に賛成しているのである。この座談の最後に麻薬の使用に関する興味深いやりとりがあるので、それを見ておこう。

Voice: Perhaps these drugs would help with income tax problems.

Another Voice: You gonna take them, or feed them to the tax collector?

[General laughter.]

Olson: There we are, right back at the whole problem. Leary wants to feed 'em to Khrushchev and Kennedy. I think that politics stinks, myself.

Voice: What does Dr. Leary feel would happen if this were used on a large scale?

Olson: Oh, he thinks happiness would descend upon the earth [laughs].

He said so, in the best interview I've seen, where somebody challenged him as being a causer of trouble, and he said "Look," he said, "this is the only way I know that guarantees happiness. If you've got a better one, I'll take it." And he's right, you know. He's talking euphoria.

Voice: Well, what is happiness?

Olson: It's the state of confidence that you're alive and in life. [Others join in laughter over defining the terms of "happiness."] (61-62)

声： ひょっとすると、麻薬は収入税をどうにかしてくれるんじゃないかな。

別の声：君が麻薬を吸うか、税金徴収人に吸わせてやるかするんだろ？（一同笑う）

オルソン：この通り、われわれは問題の全体に戻ってきた。リアリーは麻薬をフルシチョフやケネディに吸わせたがっている。そういう策略は臭い、と私自身は思う。

声：麻薬が大規模に用いられることになったら、リアリー博士は何を思うだろうね。

オルソン：ああ、彼は幸せが地上に降りてくると考えるだろう。（笑う）。

リアリーは、私が見た最良のインタビューでそう言っていた。誰かが彼を問題の元凶だとして、彼に挑んでいた。その時リアリーは言った、「いいかい」と彼は言った「これが幸せを保障する唯一の方法なんだ。もし君がもっとよい方法を知っているなら、それを僕もやってみよう」とね。分かるだろう、彼は正しかった。リアリーは多幸感のことを言っていたんだ。

声：では、幸せとは何だね？

オルソン：君が生きており、この世の中にいと自信のもてる状態だ。（他の者たちも「幸せ」を言葉で定義することがおかしくて笑い出す）。

マッシュルームの影響下にいると、幸せなのだというのがリアリーの考えである。そういうリ

アリーの考えに、オルソンは大いに賛成している。グラトウィックと知的な集団が、最後の最後に来て「幸せ」の定義がおかしくて笑い出したのなら、オルソン同様、ようやくリアリーの考えを少しは認める気持ちになったのだと言えるだろう。もっとも、録音テープはここまでで切れており、この後も座談はつづいたのだが。

しかし、座談ではマッシュルーム（シロシビン）を始めとする麻薬の効用だけが語られたわけではない。じつに頻繁に、そして長い時間、主題であるマッシュルームの効用とは別の話題が、座を占めたのである。それを急ぎ足で見ておこう。

### Ⅲ. 座談の内容—マッシュルーム体験以外—

座談の内容で、マッシュルーム体験以外のものは少なくないが、最大のものは、プラトンの詩人追放説と、外部世界を知覚する際に何が起るのかを考えたモーリス・メルロ＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty）の哲学である。まず、プラトンから見よう。

#### i. プラトン

オルソンは、プラトンが『国家』の中で唱えた理想国家からの詩人追放説を以下のように語る。

If we had a lot of hours I'd now take a mid-stage in this thing before I read my own poetry to talk about what Plato says about poetry—that it must be driven out of society, because it prevents people from the real. And I agree with him completely. Plato's argument, in reverse, is now true. Plato says absolutely, and it is utterly true, that you cannot have society because poetry—and what he means by poetry is all art, as practiced at his date (now mind you that's a damn good date), is wrong because it keeps people from the real. Now he's absolutely right. We're talking the real here. (47)

たっぷり時間があるのなら、私自身の詩を読む前に、この座談に中間段階を設けて、プラトンが詩について語っていることを話題にしたい——人々を<sup>ザ・リアル</sup>実在から引き離すという理由で、詩を社会から追放しなければならないとプラトンは言う。私は完全にプラトンに賛成だ。プラトンの議論は、全く逆の形で、今や真実だからである。プラトンは断言している、詩があると社会が持てないと、それは全く正しい——そしてプラトンが詩という言葉で意味しているのは、当時行われていた芸術全部だ（なんと良い時代だったことか考えて見たまえ）。詩が悪いのは人々を<sup>ザ・リアル</sup>実在から遠ざけるためだ。プラトンは今や、完全に正しい。われわれは、<sup>ザ・リアル</sup>実在について、ここで話しているのだから。

オルソンが詩人追放説を語るのは、マッシュルーム体験について聞きたがりながら、自分では体験しようとしないうグラトウィックとその仲間への皮肉である。オルソンは、詩を読む役目も引き受けて、グラトウィックに招かれたと考えられるのだが、「詩」を読むと「マッシュルーム体験（実在）」を語るのが、わずかでも先送りになる。その事態を「詩」が人々を「実在」から引き離すというプラトンの考えと重ね合わせたのである。

オルソンは、講演する場合には大抵自分の詩を読みながら自説を展開するのだが、この座談「マッシュルームの下で」では、一度も詩を読まない。それは、マッシュルーム体験を先に語りたいためであるのは間違いない。そのためにグラトウィックに招かれたのだから。この場合オルソンにとって詩は二義的なのである。

しかし、オルソンが有名なプラトンの詩人追放説を持ち出してまで、体験してみる気のない者には、マッシュルーム体験を話しても無駄だと言っているのに、グラトウィックとその知的な集団は、決して体験してみようとは言わず、ひたすらオルソンの体験を聞きたがるのである。オルソンがマッシュルーム体験をしてみるように一同を促し、一同がこれを見做して、体験談を聞きたがる構図は、すくなくとも座談中に3度ある。その度にオルソンは、この座談が無意味であることを思い知らされる。語っても無駄な相手であることを何度も味わいながら、オルソンは、様々な工夫をして語り続けるのである。

## ii. メルロ＝ポンティ

オルソンはメルロ＝ポンティには大変強く惹かれたらしい。フランス語の原文からの英訳が良くないところしながら、長々と語る(56-59)。「形」(“figure”)と「地」(“background”),「もの」(“thing”)と「無」(“not-thing”)などの概念(56)を用いて、過去の地平(the horizon of the past)や意識の諸構造(structures of consciousness)を語るメルロ＝ポンティの明快な語り口に感銘を受けたようだ。

[T]he object does set attention in motion. I think you'd have no trouble with that, because almost everything that you do, that your attention is called to, is an object, huh? “The object is at every moment recaptured and placed once more in a state of dependence on attention.” (58)

対象は注意を動かす。これについては問題がないだろう、なぜなら、あなたのするほとんど全てのこと、あなたの注意が呼びさまされる全てのことは、対象だからね。「対象は、あらゆる瞬間にもう一度捉えられ、もう一度注意に依拠する状態に置き直される。」

このようにして、グラトウィックとその仲間たちにオルソンは、メルロ＝ポンティを解釈してみせる。そして「知識をもたらす出来事」の箇所にくる。

But this guy's point is that the object gives rise because the attention is brought to bear on it, on “the ‘knowledge-bringing event,’ which is to transform that object only because the still ambiguous meaning which it requires lies in that event to clarify it.” In other words, that the narrative that gets started begins to be the story that will yield from the object a *raison* that causes us in the first place to give our attention to it. And it is therefore—that is, the object, therefore, is “the motive and not the cause of the event.” Which is very exciting, to get the whole thing reversed, so that we don't have cause any more, we have motive. And again we inherited a complete system of discourse for two thousand years which has absolutely crapped motive. We have lost motive almost entirely out of our mental capacity and have had cause instead. So that the tendency of the objective world to go away from us has been extremely strong, because the objective world won't be treated that way. It just doesn't happen to be causal, it happens to be motible. (59)

しかし、この男の言いたいことは、対象が起き上がるのは、注意が「『知識をもたらす出来事に』影響力を及ぼすためである。注意がその対象を変容させる、そのただ一つの理由は、注意の求める今なお曖昧な意味が出来事の中にあるが、その意味をはっきりさせるためである。」換言すると、始まった語りナラティブが物語ストーリーになり始めて、その物語が対象から理由を引き出すのだ、われわれの注意をまずそこへ向けるようにした理由を。そして、だから

こそ—対象は、「動機であって、出来事の原因などではない」のだ。これは大変興味深い。全体をひっくり返してみるのだ。すると、われわれはもはや原因など持っておらず、持っているのは動機となる。だが、再びわれわれは、完全な対話システムを二千年間受け継いできたのだ、そのシステムが断固として動機を破壊したのである。われわれの精神から動機はほとんど完全に失なわれてしまい、その代りに原因を持つようになった。その結果、客観的世界がわれわれから遠ざかろうとする傾向は、ひどく強くなった。なぜなら、客観的世界の扱い方を間違えたからだ。それは原因によって動くのではなく、動機によって動くものなのだ。

メルロ＝ポンティの難解な文を一同に紹介しながら、オルソンは、物の見方を鮮やかに転覆させる哲学の衝撃を全身で受けとめている。原因と結果によって、宇宙が成り立ち動いているのではなく、対象を変容させる注意によって、あるいは動機によって動いていることをオルソンは知るのである。では、メルロ＝ポンティの思考法がグラトウィックとその集団にどのような衝撃を与えたのかを確認したいところである。しかし、やはり彼らは言葉遊びに類するレベルでメルロ＝ポンティに触れただけのようだ。オルソンの感動は、座談の仲間には通じないのである。

最後にわれわれは、この座談「マッシュルームの下で」を総合的に考えてみよう。

#### Ⅳ. 座談のベクトル

われわれは、座談「マッシュルームの下で」を読んで、どのような全体的印象を持っただろうか。再三述べたことなのだが、座談のゲストであるはずのオルソンがどれほど努力して、聴衆を奮い立たせようとしても無駄だったという徒労感が残る。

しかし、それだけではなく、この座談には二つのテーマが並行して走っていたことが確認できたかと思う。二つのテーマのうち一つはマッシュルームからとった幻覚剤シロシピンを服用するとどのような作用が起こるかであり、もう一つのテーマは、マッシュルーム体験以外のテーマである。それは、プラトンの詩人追放説と、われわれの世界認識の方法を転倒させるメルロ＝ポンティの哲学であった。

マッシュルーム体験は、オルソンが語ろうとすると別の方向からの質問が入るなどして一度では語るができなかった。オルソンは2度のマッシュルーム体験を4度にわたって語らなければならなかった。それほど、聞く土壤がなかったと言える。聞くことも大事だが自分たちが話すことも大事だと考える集団は、話す側に対する配慮よりも自分の意見の方を重んじたので、話し手オルソンは1度目の体験についても2度目の体験についても、それぞれ補足しなければならなかったのである。

問題なのは、辛抱強く補足し、ようやく語り終えたオルソンの2度のマッシュルーム体験が鮮やかな体験として、読者には迫ってこないという点である。読者もグラトウィックとその仲間同様、マッシュルーム体験を自分ではしようとしないで、オルソンの口からその体験の醍醐味を聞こうとする点では同じかもしれない。そして、そういう者に、体験は伝えられないのかもしれない。しかし、グラトウィックの仲間がいかに、話し手に対する配慮に欠けようと、座談を読み終えた読者の胸に何事かを理解できた喜びがわいてこないのも確かなのである。

もう一つのテーマ、すなわちプラトンとメルロ＝ポンティについてオルソンが語ったことはどうであったか。これも、グラトウィックとその知的な集団には、感銘を与えなかったらしい



のだ。マッシュルーム（シロシビン）は、薬物であるから積極的には体験したくはないと考えても無理はない。しかし、プラトンとメルロ＝ポンティは、真実を希求する哲学者である。彼らの著作を警戒する必要はない。ところが、この集団は真実にも、あまり関心がないようだ。

マッシュルームが見せる幻覚や幸福感も、真実を追い求める思考の鮮やかさも、座談会に集まった人たちには、魅力的ではないらしいことが分かった。せいぜい「幸せ」の定義をしようとするのが可笑しくて、「何人かが笑った」のが、座談「マッシュルームの下で」の成果であった。その成果を得るまでの途方もない時間と、数限りない工夫と、失望を露わにできない挫折感と、その他さまざまな思いがオルソンの胸を去来したことであろう。しかし、その情けなさを抑え込みながら、思いの伝わり難い相手に語るべきことは語り伝えようとする態度に、われわれは現実の中で生きる詩人の日々の努力を見るべきである。このような日々の営々とした努力は、叙事詩『マクシマス詩篇』を書くことと根元のところで繋がっていたに違いないのだから。

#### 参考文献

- Olson, Charles. "Under the Mushroom," *Muthologos* vol. I. Bolinas, California: Four Seasons Foundation, 1978. 20-62.
- , "On History," *Muthologos* vol. I. Bolinas, California: Four Seasons Foundation, 1978. 1-19.
- , *The Maximus Poems*. Ed. George F. Butterick. Berkeley: University of California Press, 1983.
- 『リーダーズ英和辞典』第2版, 編集代表 松田徳一郎, 研究社, 1999年。